

## 演じられる武 — 剣道

木原資裕\*

(キーワード：演武 剣道 殺傷の術 芸道 スポーツ)

### I. はじめに

スポーツの世界での採点競技において、自分の持っている技能や力量を表現することを「演技」という言葉を用いている。体操競技・シンクロナイズドスイミング・ダンス・アイススケートなど、観客および採点者に見せる形式の競技ではよく聞かれる言葉である。

一方、武道の世界では一般的には「演技」ではなく、「演武」という表現が用いられ、一人で行う弓道・居合道、二人で形を演ずる杖道・なぎなた・少林寺拳法・空手などで使用されている。しかし、スポーツおよび武道の対人試合形式の競技においては「演技」あるいは「演武」といった表現はほとんど見られない。ただ、剣道にのみ対人試合形式で「演武」という言葉が用いられている大会がある。毎年、五月の連休に京都武徳殿で行われる「全日本剣道演武大会」である。2006年で102回となる伝統の大会であり、2006年の剣道演武者は1,946名であり、北海道から沖縄、海外よりもヨーロッパやアメリカの参加者が集う。原則、一人一試合、試合時間は二分間、三本勝負で勝負のつかない場合は引き分けとなる。北海道であろうと海外であろうと一人二分間の時間しか、与えられない。この二分間に一年間の修行の成果が発揮できるよう互いに無駄な動きや技を出さず、精錬された技が繰り出され、品格が漂う試合となっている。この京都での演武大会に準じて開催している大会に、東京剣道祭(1961年に第1回大会)とパリ大会(1998年に第1回大会)がある。

もちろん、これらの大会以外には剣道においても、チャンピオンシップを争う選手権大会や優勝大会という名称の大会が多く、勝負が決するまで延長戦を行い、優勝者や団体戦においては優勝チームを決めるのが通例である。

このように現在の剣道試合形式においては、武的な要素を主として展開するものとスポーツにおけるチャンピオンシップ的展開をするものとが混在している。それらの中で、試合形式は違えども、剣道には日本の伝統的運動文化として、「演武」の要素があると筆者は考えている。

本論では剣道の演じられ方についていくつかの事例から考察を深めることとする。

### II. 剣道の構成要素

作道<sup>1)</sup>は武の文化性として、武術(実用文化)・武芸(芸道文化)・武道(競技文化)という要素と歴史的流れがあることを指摘している。その指摘を踏まえ、剣道を構成要素として、以下の三つの層が存在していると想定した。

第1層 殺傷・実用の生死を賭けた闘いの術

第2層 芸道としての修行・稽古

第3層 有効打突を競い合うスポーツ

図1は、そのイメージ図であるが、殺傷の術の上に、芸道の層がかぶさり、さらに、その上にスポーツの層が重なっていると考えられる。かなりの部分がスポーツに覆われているようにみえるが、内面的には殺傷の術や芸道の部分が存在している。

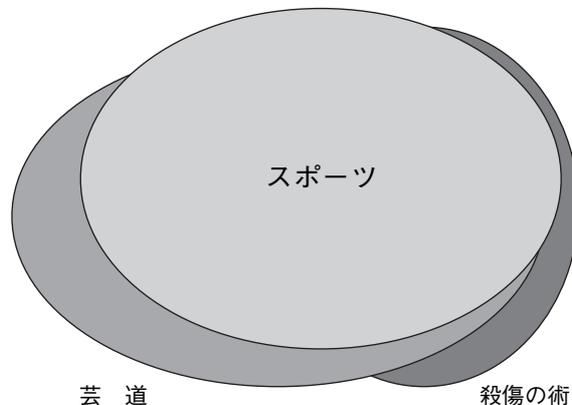


図1 剣道の構成要素のイメージ

\*鳴門教育大学生生活・健康系(保健体育)教育講座

## 1. 殺傷の術にみられる武

現代に生きる我々は実際の殺傷の闘いを見ることはできないが、殺傷の闘いに近い格闘技を観客として見るができる。ここで、取り上げたいのは、アルティメット大会である。この大会は「何でもあり」のルール（ただし、噛み付きと目潰しと金的への攻撃は禁止）で、ギブアップかノックアウトまで行われる。「オクタゴン」と呼ばれる八角形の金網で囲まれたリングで行われ、寝技の時間制限もないため、レフリーによるブレイクもない。この大会は1993年よりアメリカで行われ、2002年4月より、wowowが日本での放送権を得て、試合を放映している。近年では、初期のころの「何でもあり」から、細かな規定<sup>註1)</sup>がされるようになり、ラウンド制に移行し、スポーツとして観客を意識した展開がなされている。

筆者が参考としたい点は、初期のころの試合でルールの規制のほとんどない状況では、どのような戦い方をするのかという点である。1994年の第4回大会では、グレーシー柔術のホイス・グレーシー<sup>註2)</sup>が3度目の優勝をしており、グレーシー柔術<sup>註3)</sup>が世界最強の格闘技ではないかと注目を浴びはじめていた時期である。グレーシー柔術の闘い方は、空手家、キックボクサー、プロレスラーを相手に、相手からのキックやパンチをかわし、一気にタックル・寝技に持ち込み、そこから徐々に自分有利の体勢を作り、最後は、関節技か絞め技で相手をギブアップさせるという展開である。第4回大会の決勝では、14分も寝技が続き、見る立場からするとほとんどが寝技の展開では、どのような技術を駆使しているのか、あまり理解できないものであった。

素手で闘う場合、相手からの攻撃を受けない「間」は、相手に密着することが絶対的なセオリーであることがわかる。K1やボクシングの試合においては、クリンチという技術で相手に抱きつき、相手の攻撃を受けないで、自分の不利な状況をカバーしようとするのが、一般的であるが、観客には試合者が休んでいるように見えるため、レフリーはこの状況をすぐに解消させようとブレイクを命じている。

前述したように、この初期のアルティメット大会でも、噛み付きと目潰しと金的への攻撃は禁止されている。ある意味で、格闘競技における最低限のモラルの共有事項ということであろう。しかし、少林寺拳法では、護身の術として、目と金的への攻撃の技があり、最小限の力で屈強な敵を倒すことができる方法として修練されている。また、子供のケンカにおいても力の弱い者が強い者に対抗する最後の手段として、噛み付きがあり、この噛み付きによって、形勢は逆転する。つまり、本当の「何でもあり」＝噛み付き・目潰し・金的への攻撃をも可能にすれば、その対人的な闘い方も変化せざるを得ない。

また、武器を持つことも許せば、どうであろうか。槍や剣を持ち、さらに、一対一ではなく、団体に闘うことになれば、背後からの攻撃にも備えなくてはならず、寝技で長々と相手が崩れるのを待つわけにはいなくなる。おそらく、武器を持ったもの同士の闘いにおいては、相手との密着による「間」は、素手による安全な「間」ではなく、どちらかが致命的なダメージを負う危険な「間」となったはずである。

剣道においても、戦前の剣道を修行された多くの方は、鏝<sup>つばざり</sup>競合いからの足払いや腰投げ、組み打ち（相撲と柔道がミックスした形式）、寝技から相手の首を絞め上げたりといった荒稽古をされていた。さらに、戦前の試合においては、組み打ちから、相手の面の紐をほどき、相手の面を剥ぎ取った方が1本とされていた時代もあった。現在の剣道試合規則では、上記の行為はすべて反則として扱われる。実践を想定した剣道の「間」は、いつしか現代剣道の片隅に追いやられた感がある。

## 2. 芸道としての修行・稽古にみられる武

### (1) 剣道の昇段審査について

剣道連盟の施策として、昇段審査システムが剣道の普及・発展の大きな原動力となっている。審査という芸道の展開は、修行者のモチベーションを高め、さらに審査料・登録料といった剣道連盟の運営資金をもたらすという効果を伴う。剣道愛好家は、現在、日本に約200万人いるとされるが、そのほとんどの愛好家は、級や段で、その修行の程度を評価されている。全日本剣道連盟は段位の評価基準を文章として、規定しており、その内容の概略を右のように表にまとめてみることができる。

表1 昇段審査評価基準

段位	修行の内容	修行の状態	技 倆
初段	基本	修習	良
二段	基本	修得	良好
三段	基本	修練	優
四段	基本と応用	修熟	優良
五段	基本と応用	錬熟	秀
六段	精義	錬達	優秀
七段	精義	熟達	秀逸
八段	奥義	通暁・成熟	円熟

修行状態の各段位の具体的な違いとして、まず、国語辞典による意味合いの違いを調べてみると次のようになる。

修習……おさめ習うこと。

修得……習いおさめて会得（えとく）すること。

修練……精神・芸芸などを、みがききたえること。

修熟……（習熟として、ある物事に慣れて十分に会得すること。）

錬熟……慣れて巧みに行くこと。なれて上手になること。

錬達……ものごとによく慣れて、巧みなこと。

熟達……熟練し上達すること。

成熟……情勢や機運などが最も適当な時期に達すること。

これらの言葉から、剣道の修行の状態が経験を重ねることによって、「習う」段階から「練る」段階、さらに「熟する」段階へと移っていくことが推察できる。しかし、ここに表現されている内容の評価は、審査員の経験則に基づく主観によって評価される。特に、八段審査は合格率約1%の難関である。

## (2) 剣道の熟し方

次にあげる文章は、警察大学教授で剣道の指導をされている真砂威氏（剣道八段）が50歳の時に著わしたエッセイの一部である<sup>2)</sup>。

……前略……

思えば20代前半は警察の選手として試合に勝つことに全てを懸けてきたのだが、26・7歳の頃から、今自分がやっている競技剣道について大きな疑問が生じてきた。「現代の試合剣道は武術として果たして役立つのか？」と繰り返す自問自答に納得する答えが出てこない。はっきりとした剣道観を持ってぬま、モヤモヤとした気持ちで焦燥感を募らせていた。

そのようなことで、たいした試合実績も残すことなく選手生活を終えることになるが、青年期後半、「競技と武術」との矛盾に苦しみ抜いたお陰で、ある一つの「一人稽古法」に行き当たることができた。それは竹刀で相手の打突部位を『いかに速く打つか』という従来の考えから一転して、我が身の体感を頼りに、「自分にもっとも適した型を創り上げる」ことが先決であると言うことに気がついたのである。あたかも水泳において、速く泳ぐことより先ず「水にゆったりと身を任せた体感のよいフォーム」を身につけることが大切であると言われるように、剣道においても打った打たれたの相対的技術より「自分の身体と竹刀とが一体となった打突フォーム」を創り上げることが肝心と考えついた。このような自分の体感に快い打突フォームが完成すれば、それは最も自然であり且つ機能的に最善であるはず。

このようにして自分の修業の方向は定まったものの、自分の体感を頼りに繰り返す打突フォーム創りは、思いの外無味乾燥なものであった。思うようにならない自分の身体が歯痒く、フォームの美的快感とはほど遠い、ごくしゃくとした我が身を持って余す日々の連続、産みの苦しみは長い——はて、何ヶ月ぐらい経ただろうか。

はっきりと気付かぬまま、いつしか我が身の中に秩序立てられつつある技術の進展というものが腰の周辺から体感出来るようになっていた。また、それらの体感は、次々と新たな鍛錬法を派生させ、技術を工夫する楽しみも味わえるようになった。そして体感に心地よい合理的な身体技術は、「競技と武術」を結ぶ接点の一つになるということも自分なりに納得することが出来た。

それから十数年、試行と錯誤を繰り返しつつ今まで行った鍛錬法、一人稽古が効果的であったのかは詳らかではないが、確かに若いときより竹刀の振りが強く、しかも鋭くなった実感はある。また、自己満足に過ぎないのかも知れないが、竹刀を交えた身体のさばきは以前より円滑となり、また、充実感も増し、パワフルになった感じさえする。これから先こういう実感が持てる剣道人生であるならば、「老いることも楽しみである」とさえ思えるのである。

……後略……

この真砂氏のエッセイの中に、40歳を過ぎての「一人稽古法」によって、「自分の身体と竹刀とが一体となった打突フォーム」創りを目指す中で、我が身の中に技術の進展があることを体感できたことが述べられている。また、このことによって、50歳過ぎの今の自分が、若い時の自分より、竹刀の振りが強く、鋭くなり、身体のさばきも円滑・充実・パワフルになった感想を語っている。さらに、こういう実感が持てるなら「老いることも楽しみである」とし

ている。まさに、剣道の動きが熟しつつある者の感覚であろうと推察できる。

### (3) 本当の剣道の修行

昭和の剣聖と呼ばれ、80歳を過ぎても現役選手を寄せつけなかったといわれる持田盛二先生（剣道十段）は89歳で倒れられるまで道場に立ち続けられたそうである。持田先生が、剣道の真髓を語った遺訓として次のような言葉が残っている。

「私は剣道の基本を体で覚えるのに50年かかった。50を過ぎてから本当の剣道の修行に入った。心で剣道をしようとしたからである。  
60歳になると足腰が弱くなる。この弱さを補うのは心である。心を働かせて弱点を強くするよう努めた。  
70歳になると身体全体が弱くなる。今度は心を動かさない修行をした。心が動かなくなれば、相手の心がこちらの鏡に映ってくる。心を静かに動かせないよう努めた。  
80歳になると心は動かなくなった。だが、時々雑念が入る。今は心の中に雑念を入れないように修行している。」

現代に生きる若者は、若々しく筋力に満ちた肉体を理想の存在とし、老いの姿を醜いものとして、接してはいないだろうか。剣道を中高年まで継続することにより、剣道の熟し方が、老いの究極まで繋がっている。この老いの姿を尊び、三世代（少年・壮年・老年）の者がともに剣道を実践できることは、本当に剣道のすばらしい芸道的展開である。

## 3. 剣道のスポーツ的展開にみられる武

ここでは、NHKで放映された人間ドキュメント『ただ一撃にかける』で取り上げられた内容について考察をしていくことにする。

このドキュメントは、剣道世界選手権大会の模様を中心にした番組で、平成15年度文化庁芸術祭優秀賞を受賞している。平成15年7月19日に最初の放映があり、筆者の把握している範囲でもすでに4回の再放送がなされている。

### (1) 剣道世界選手権大会

FIK（国際剣道連盟）が1970年に設立されており、2006年現在、44カ国・地域を代表する団体が加盟している。剣道世界選手権大会は3年に1度行われており、2003年イギリスのグラスゴーで第12回大会が行われ、世界各地より500名を超える剣士が集まっている。世界の剣道人口は、その9割を日本と韓国で占めており、当然のこととして、その競技力も日本と韓国が他を寄せつけない高さをもっている。これまでの世界選手権は、すべて日本が団体と個人のタイトルを取っているものの、韓国との決勝戦はいつも薄氷を踏む思いの戦いになっている。

### (2) 『ただ一撃にかける』

この人間ドキュメントの番組の概要を述べていくこととしたい。

番組の焦点は、日本チームの大將を務める栄花直輝（えいがなおき）選手にあてられている。北海道警察機動隊勤務の35歳の警察官である。この番組の展開は、どのように栄花選手が世界選手権大会における日本チームの大將にふさわしい選手になっていったかを、その時々の写真・映像やインタビューを用い、ドキュメントとして表現している。

最後のクライマックスは、世界選手権大会団体戦、韓国との決勝戦である。韓国はこの世界選手権に向けて、36回もの合宿を行っており、今回は特に、精神力の強化のため、座禅も取り入れたという。日本は6回の合宿であった。それだけでも、対日本戦への韓国の強い意気込みを感じる。さらに、韓国チームの大將に20年間、韓国代表の選手として活躍し、日本戦では負けたことがない、巨漢（身長180cm）のキム選手（38歳）を起用してきた。決勝戦は、1勝1敗2引き分けの流れで、大將・栄花選手の登場となる。ちなみに栄花選手の身長は168cmである。キム選手との大將戦は引き分けとなり、代表決定戦が行われることになる。

この代表戦では、チーム内の任意な者を選手起用可能になっているので、当然、監督が一番信頼のおける勝負強い選手を起用することになる。日本の小林英雄監督は、選手を集めて、「代表戦は、栄花！ 後は、栄花にまかせて行く」と栄花選手を指名した。それに対して韓国も、大將キム選手を起用、大將戦の再現となる。しかし、代表戦は時間無制限の一本勝負であり、勝負の決するまで行われる。

会場内は静まりかえり、栄花選手とキム選手の竹刀がしのぎ合う音だけが響く、10分過ぎ、キム選手が栄花選手の

竹刀を叩き落とそうと、大きく竹刀を振ってきた。それに、栄花選手が耐え、キム選手が構え直したその直後に、栄花選手の捨て身の片手突きが、決まる。映像はその片手突きが決まる瞬間をスローモーションで再度見せており、その技の見事さを確認することができる。

会場からは大きな拍手。試合後、栄花選手を取り囲む日本選手が握手と肩を抱き合いながら、感極まっている。また、ヨーロッパの選手が泣きながら、「すばらしい試合ありがとう」と栄花選手に抱きつき感謝するシーンもあった。

### (3) 剣道がオリンピック種目になることには反対する全日本剣道連盟

このドキュメントの前半部分のナレーションに次のような部分がある。

「剣道をオリンピック種目にすべきかどうか。日本は、メダル競争に巻き込まれて、勝つことがすべてに優先することになるので、反対の立場をとっている。」「剣道は打って反省、打たれて感謝という言葉がある。試合の勝ち負けよりも、自分の弱点を見つけ、克服する精神力が大事である。」「そうした考えも、世界大会で日本が簡単に負けるようでは説得力がない。日本の伝統を守るためにも、代表選手には常に勝つことが求められている。」

つまり、勝負にこだわる弊害が、剣道をダメにすると言いながらも、日本の伝統を守るために勝負にこだわらねばならないとしている。

日本が剣道をオリンピック種目にしたくないとする理由の大きなものとして、同じ武道である柔道の国際化の問題がある。東京オリンピック(1964年)当時の柔道のビデオ見ると、現在の国際ルールでは、投げられて背中が着けば、「一本」とされるが、東京オリンピック時の「一本」は技にキレがあり、投げられた相手が納得するような技でない一本となっていない。キレがなく背中がついた技は「技あり」にも評価されない。1974年よりは、「一本」「技あり」に加えて「有効」「効果」の判定基準が加わっている。判定基準も視覚的にどのようになったかが問題であり、技のキレに関する日本的な評価は切り捨てられている。また、1997年にはカラー柔道着が採用されるに至っている。まさに「柔道」が「JUDO」へ変容し、レスリング化しているように見える。

日本の伝統的運動文化である柔道が近代西欧の合理主義に基づくスポーツの論理に飲み込まれていった感がある。日本の剣道界がオリンピック種目となることに反対しているのは、剣道の伝統を守らんがためであろう。しかしながら、韓国や他の国々においては、オリンピック種目となり、競技人口が増え、スポーツとしての剣道の国際的な広がりができることを期待している。

もちろん、西欧の文化圏の人々が日本の武士道や武道精神にあこがれて、剣道を始める人々も多くいることも事実ではある。しかし、競技力が日本と拮抗してくれば、日本人が日本の剣道の伝統にこだわるのは自由としながら、伝統ばかりに固執しては、国際社会で通用しないとされる時代がくるかもしれない。

### (4) 栄花選手の3つの気づきの場面

図2はこの番組で取り上げている栄花選手の3つの気づきの場面を表したものである。

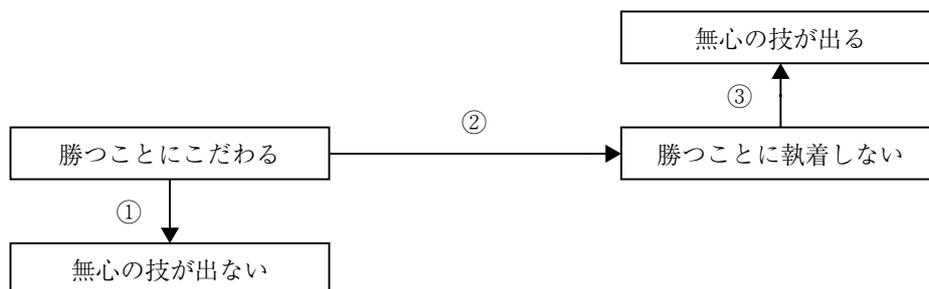


図2 番組における栄花選手の3つの気づき場面

#### ① 「勝つことにこだわり」「無心の技が出ない」

前々回の世界選手権大会では、代表選手に選ばれながらも、出場できたのは、予選の1試合のみであった。29歳で体調万全の時であっただけに、試合で起用してもらえない屈辱を味わうことになる。そのことの中で、監督や他の選手に信頼させる実績をつけたいと思い、全日本選手権のタイトルを狙う。

全日本選手権大会準々決勝、相手は前回優勝者で通算5回優勝の平成の超人と呼ばれている神奈川県警の宮崎正裕選手である。栄花対宮崎、テレビ解説者もこの試合が事実上の決勝に近い試合であると評価している。

この試合について、栄花選手は対策を練り、考えた技、「宮崎選手が得意の面にくるところを胴に返す」を試合終盤で出している。ねらっていた技だけに手応えは十分であったはず、しかし、審判の判定は宮崎選手の「メンあり！」であった。スローモーションの映像では、確かに宮崎選手が面にくるところを竹刀で受けて、胴へ返しているように見える。そのことについて、栄花選手は「試合をしていたときは、自分が打った胴が決まったと思っていましたが、後で、ビデオを見たときに、宮崎選手の打った面だなと感じました。それは、私は勝つことにこだわって、対策を練って、ねらって打った技に対して、宮崎選手はその一瞬に、自分を捨てて無心で放った技との差ではないか。」と語っている。

## ② 「勝つことに執着しない」ことへの悟り

宮崎選手に敗れて、自分の剣道には、何が足りないのか。そこをつかむために、毎朝7時にだれもいない道場に通り、初めて竹刀を握ったころの原点に戻って、剣道を考え直そうと、150畳の剣道場の床を30分かけて、雑巾で磨きあげる。雑巾がけの後、道場での一人稽古の映像を見せながら、ナレーションが流れる。「徐々に見えてきたのは、勝とうとする心の未熟さでした。」

栄花選手自身も「ただ単に勝負にこだわってはいは、そこには、無心の技は出てこない。変な欲が出てくる。それを克服するために違う面を鍛える。心の問題ですかね。」と語り、ナレーションが「勝ちたいという欲。敗れることへの恐れ。目指したのは、すべてを捨てきった一撃でした。」とこの場面を締めくくっている。

## ③ 「無心の技が出る」

宮崎選手に敗れた1年後、2000年11月の全日本選手権大会の決勝に、栄花選手が勝ち残っている。決勝の相手は、もちろん、3連覇、通算7度目の優勝をねらう平成の超人、神奈川県警の宮崎正裕選手である。20世紀を最後の全日本選手権大会にふさわしい対戦である。

前は、栄花選手の技の仕掛けが多く見られたが、今回は明らかに宮崎選手の技の仕掛けが多い。栄花選手の研ぎ澄まされた気迫に、宮崎選手が過剰に反応している様に見える。制限時間が終わり、時間無制限の延長戦に入った。数度の打ち合いの後、宮崎選手が得意の面に飛ぶ。それを栄花選手が下がりながら、面が打たれる紙一重のところかわし、すかさず、宮崎選手の小手を打っている。「面抜き小手」栄花選手が優勝を決めた見事な一本である。試合後、その一本について、栄花選手は「考えて打てる技ではない。もう一度打てと言われても今も打てない。自然に体が反応した無心の技。」と語っている。栄花選手が日本の大将としてふさわしいと認められた一本であった。

## (5) 無心とは何か

このドキュメント番組のテーマは「自分のすべてを出し切った無心の一撃」である。先述したが、栄花選手自身も「ただ単に勝負にこだわってはいは、そこには、無心の技は出てこない。変な欲が出てくる。それを克服するために違う面を鍛える。心の問題ですかね。」と語っているが、道場の雑巾がけと一人稽古で実際にどのような鍛え方をしたのかが、明確に示されていない。

『猫の妙術』<sup>註4)</sup>に関連して、小川忠太郎範士は無心について次のように講演している。<sup>3)</sup>

古猫が部屋に入っていくと、ネズミはすくんでしまっていて難なくつかまえることができた。そして古猫は、これは別に技を使ったわけではなく、無心でいっただけだということ。ここを誤解する人が多い。というのは、みんな言葉の上だけで無心とか無念無想とかを考えて、そういうものがあると頭の中で思っているが、実際には、人間にはこんな状態はないのである。古猫の境地は頭で考えた無念無想ではなくて、逆に頭がはっきりした「正念正想」である。・・・中略・・・また、勢いよくまわっている独楽(コマ)は、まるで動いていないように見えるが、手を触れるとビリッとくる。外見は同じでも止まっている独楽とは内容が違う。・・・中略・・・理論で求めようとするとうまくいかない。剣道はあくまで稽古、稽古。しかしその稽古も理論を知っておくことは必要だ。その上で、一に稽古、二に稽古、三に稽古である。

栄花選手もおそらく、勝負にこだわる自分の心の問題を稽古の中で試行錯誤していきながら、「正念正想」したと思われる。この稽古を通した「正念正想」が、自分の心のにごりを何もなかったように澄ませてきて、無心と感ずるのではないだろうか。

(6) テレビ番組が持つ力

前述したように、栄花選手を取り上げた人間ドキュメント『ただ一撃にかける』は、平成15年度文化庁芸術祭優秀賞を受賞しているすばらしい番組であり、多くの人々に感動を与えたことはいうまでもない。ただ、筆者が指摘しておきたいことは、番組作成の中で、彼に関するいろいろな情報が精査され、カットされている部分が多くあり、制作者の意図する展開に事実を配列し直している点である。

図3はリー・トンプソン<sup>3)</sup>がワネルの先行研究を引用しつつ、テレビ番組制作の三つの原理と番組形態を図示したものである。テレビ番組の制作には「報道」「娯楽」「ドラマ」という三つの基本的要素があるという。今回の人間ドキュメントは、客観性・中立性を原則とする「報道」的要素と視聴者を物語に引き込む「ドラマ」的要素をともに含んでいる。映像として流れていることはすべて事実であるが、物語にするために、事実の取捨選択が行われている。

例えば、栄花選手が剣道世界選手権に選手として出場しているのは、1994年の第9回大会から4回も出場している。栄花選手の世界大会での戦績を示すと以下ようになる。

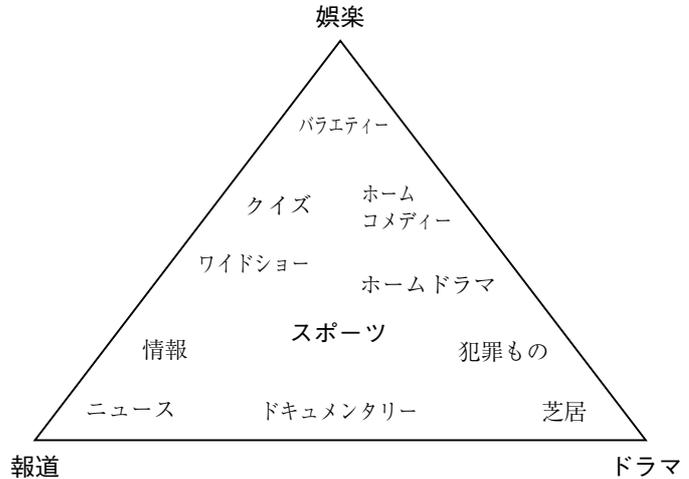


図3 テレビ番組製作の三つの原理と番組形態

- 1) 1994年フランスでの第9回大会 個人戦3位
- 2) 1997年京都での第10回大会 団体戦予選1回のみ起用
- 3) 2000年アメリカでの第11回大会 個人戦優勝 団体戦優勝(次鋒)
- 4) 2003年 イギリスでの第12回大会 団体戦優勝(大将)

番組の中では、1)と3)のことが全く触れられていない。4)の大将での団体優勝を際立たせる意味で、あえて2)だけを過去のデータとして使用しているのである。

また、全日本選手権の戦績においても、以下ようになる。

- 1) 1992年 40回大会 3回戦
- 2) 1993年 41回大会 2回戦(優勝者宮崎正裕に敗れる)
- 3) 1994年 42回大会 1回戦
- 4) 1995年 43回大会 ベスト8
- 5) 1996年 44回大会 2回戦
- 6) 1997年 45回大会 3位(優勝者宮崎正裕に敗れる)
- 7) 1998年 46回大会 ベスト8
- 8) 1999年 47回大会 ベスト8(優勝者宮崎正裕に敗れる)
- 9) 2000年 48回大会 優勝
- 10) 2001年 49回大会 2回戦
- 11) 2002年 50回大会 3回戦
- 12) 2003年 51回大会 3回戦

12年間、連続で北海道の代表選手となることは、並の剣道家ではありえない。平成の超人・宮崎正裕の戦績には及ばないが、栄花選手は剣道界のスパースターであることは間違いない事実である。決して遅咲きの剣道選手ではない。

(7) 勝つことを超越

栄花選手は、番組のできばえとは関係なく、日本を代表するに値する剣道家である。右ヒザ・左手首の手術、アキレス腱痛、右ヒジ痛、右手首痛等々の満身創痍の中、困難から逃げない、その剣道に対する情熱と努力は、誰もが認めるところである。

勝ちにこだわる自分の内面を真摯に見つめながら、稽古を繰り返していく内に、そのこだわりの気持ちの濁りが、何か自分の内面でとぎ澄まされてくる状態なのである。このことは、単なる観念論で到達できるものではなく、そこへ至る長く厳しい修行が必要であることはいうまでもないが、真に心をつつ技は、その人の内面的充実がなければ、出現することはできない。

### Ⅲ. おわりに

現代剣道において、殺傷の術としての武はその実用性を失っている。ただ、試合規則の中に、有効打突の規定として、「・・・竹刀の打突部で、打突部位を刃筋正しく打突し、・・・」とあり、竹刀を刀として扱うことが明記されている。しかし、四つ割の竹を丸く組んだ竹刀と鋼鉄に刃がある刀では、その操作法は大きく違っている。あくまで観念としての刀であるにもかかわらず、剣道の理念として、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」ことを常に宣揚し、剣道連盟所属の会員を教化しており、殺傷の術としての武は、その理念の中に展開されている。

芸道としての武は、現代剣道の中核的課題となっている。特に、剣道昇段審査システムの中で修行の内容・状態・技量を評価することで、芸道の要素がより強く意識されている。さらに、そのことで修行者のモチベーションが高まり、中高年まで継続することによって、円熟した境地へと導かれている。

スポーツとしての武の展開は、剣道の試合の中に、その精神的充実としてみることができる。稽古を通して、無心の技をつかむことに表れているように思える。また、前述の試合規則の中に、有効打突の規定として、「・・・打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする。」とあり、この「残心」は一般のスポーツ概念にはない剣道独特の武的要素である。つまり、相手を打突した後も、身構え・気構えをゆるめてはならないとの規定であり、「打突」と「残心」が揃ってはじめて有効打突（一本）となるのである。ここにも剣道の演武性を色濃くみることができる。

### 脚 注

注1) 頭突きや髪を引っ張ることなど、主なもので31項目が反則事項になっている。

注2) 第1回、第2回、第4回大会で優勝。身長185.4cm 体重81.6kg である。

注3) 嘉納治五郎が創始した講道館柔道を学んだ前田光世がブラジルでカルロス・グレーシーに柔術を教えたことが、グレーシー柔術の出発点となる。

注4) 作者は佚斎樗山(1659-1741)であり、彼の著作である『田舎莊子』全十冊の一章である。江戸時代でも数少ない老荘思想の啓蒙書で、難解な思想を寓話方式により、わかりやすく表現されている。また、幕末の剣術家で、無刀流の開祖である山岡鉄舟もこの『猫の妙術』を愛読し、秘蔵したとされる。

### 引用・参考文献

- 1) 作道正夫, 快剣撥雲 ― 豊穰の剣道, 体育とスポーツ出版社, 2004, 11-13.
- 2) 真砂威, 第3回おんたけ全国指導者講習会配付資料, 1995.
- 3) 小川忠太郎, 剣道講話 (一), 体育とスポーツ出版社, 1993, 283-286.
- 4) リー・トンプソン, 池田勝・守能信次編, スポーツの社会学 7. スポーツとメディア, 杏林書院, 1998, 146-147.
- 5) 木原資裕, 剣道における動きの熟練性, スポーツメディスン誌2002-41, 2002, 34-37.
- 6) 木原資裕, 勝つことを切り落とす, スポーツメディスン誌2004-59, 2004, 29-31.
- 7) 渡辺一郎編, 武道の名著, 東京コピー出版, 1979.
- 8) 三牧岳, 現代剣道における称号・段位制度の構造と展開, 鳴門教育大学大学院修士論文, 2001.
- 9) 中村民雄, 剣道辞典 ― 技術と文化の歴史 ―, 鳥津書房, 1994.
- 10) 大塚忠義, 日本剣道の歴史, 窓社, 1995.
- 11) 大塚忠義, 日本剣道の思想, 窓社, 1995.
- 12) 全日本剣道連盟編, 剣道の歴史, 全日本剣道連盟, 2003.

# **KENDO is performed as “BU”**

Motohiro KIHARA \*

(Keywords : Performance, Kendo, Art of casualties, Accomplishments, Sports)

Now, there are coexisted in KENDO which to develop of the championship in sports and the elements of the martial arts. And KENDO has the elements of performance as Japanese traditional exercise culture. The purpose of this study was to deepen the consideration about performance of KENDO from some examples.

The results were summarized as follows ;

- 1) In KENDO, "BU" as art of casualties lost the utility. The operation method was different from the bamboo sword with the sword greatly. "BU" as art of casualties was developed in the idea.
- 2) "BU" as accomplishments became the problem of the core of KENDO. In particular the element of accomplishments was been conscious of more powerfully by evaluating contents of ascetic practices in the KENDO promotion examination system. Motivation of the exercisers rose with the system, and it was led to the stage that matured furthermore by continuing to old and middle age.
- 3) Development of "BU" as sports could consider a lot of examples as the mental substantiality in the match of KENDO. Through the lessons, It was get the hold of the innocent skill.

---

\*Naruto University of Education, Department of Health and Living Science (Health and Physical Education)